

古代キリスト教の生きた姿に触れて

—古代キリスト教とヘレニズム思潮
プロジェクト主催公開ワークショップ報告—

水落 健治

去る12月13日、「古代キリスト教とヘレニズム思潮」プロジェクトの主催で、アメリカ、ノートルダム大学名誉教授 Charles Kannengiesser、及び、カナダ、コンコルディア大学教授 Pamela Bright ご夫妻をお招きして研究ワークショップが行われた。

カンネンギーサー教授は、フランス・ストラスブール大学で学位を取られ、長年パリ大学やアメリカのノートルダム大学で教鞭を取って来られた教父学の分野での世界的権威である。氏は、正統的三位一体論の確立者といわれるアタナシオスの著書の長年にわたる研究を通じて、アタナシオスが「父・子・聖霊の本質における同一性」——いわゆる「ホモ・ウーシオス」の説——を述べたとされる著作が偽作であることを論証し、これまでのアタナシオス研究を新たな段階に導いたことで名高く、オックスフォード大学で4年毎に開催される「国際教父学会」International Conference of Patristic Studies では指導的役割を果たしておられる。

また、ブライト教授は、教父アウグスティヌスの主著のひとつである『キリスト教の教え』De doctrina christiana に決定的な影響を与えた異端ドナトゥス派の司祭ティコニウス Tychonius の聖書解釈論に関するはじめての本格的研究によって学位を取られ、現在、英語圏での教父研究に欠かせない存在として、夫君と共に活躍しておられる。

ワークショップでは、まず、カンネンギーサー教授の「オリゲネスとプロティノスにおける三一的思惟」Triadic Thought in Origen and Plotinus という題の講義が2時間近く行われた。「三位一体」の教えは、キリスト教の中心的教義であるが、これは単にキリスト教に固有のものではなく、類似の思想は、紀元4～6世紀の新プラトン派

の思想家（プロクロスなど）にも現れている。そこで教授は、紀元2～3世紀にアレクサンドリアで活躍したキリスト教思想家オリゲネスと、ほぼ同じ時代にアレクサンドリアで学んだ新プラトン派の思想家プロティノスを取り上げ、両者に共通の背景として「中期プラトン派」と呼ばれる思潮が存していたこと、そしてこの思潮の不完全な部分を完成しようとする二つの動きが、キリスト教における三位一体論と新プラトン派における三一論として結実して行ったことを、詳細かつ実証的に示された。

続くブライト教授の講義は、「アントニオスとオリゲネスにおける悪霊との闘い」*The Combat of the Demons in Antony and Origen*と題されて行われた。紀元3～4世紀、国教化し墮落して行くキリスト教に抗してエジプトの荒野に隠遁したとされるアントニオスは「修道制の開始者」として名高いが、このアントニオス研究においては、アタナシオスの『アントニオス伝』とアントニオスの『書簡』との内容的齟齬、という困難な問題があり、この問題が『書簡』の真作性を疑わせる、などの様々な論争を引き起こしてきた。そこで教授は、これまで偽作ではないかと言われてきたアントニオス『第七書簡』を取り上げ、そこにあらわれる「悪霊との闘い」のモチーフを検討し、それがオリゲネスの名著『原理論』に現れる同様の主題と----その主題と論理の運び方において----平行関係にあることを示され、同書簡の真作性を明らか

にされた。

講義の後、その内容をめぐって様々な質疑応答が活発に交わされたが、講義とその後の質疑応答を通じて浮かび上がって来たのは、古代キリスト教の様々な教義や新プラトン派の思想がどのような状況の中で、どのような相互交渉の中で成立して行ったのか、についての生き生きとしたイメージである。筆者は、地道な文献学的作業を突き抜けて古代人の思想・生活の生の姿に迫ろうとする、学問のひとつの理想的あり方をここに垣間見た気がした。

出席は25人ほどで教父学の研究者が多かったが、ギリシア哲学の研究者などもおられ、また、中には筑波、岡山、仙台などから駆けつけて下さった方などもあり、さらに、同時期に国際学部主催で開催されていたワークショップに招聘されていたイタリア、ポローニャ大学ポリ教授の参加などもあって、会は盛況であった。学問的に、極めてレベルの高い集まりであったことは改めて述べるまでもないであろう。

（みずおち けんじ

所員、一般教育部教授）